

[1]

ある日お風呂から部屋に帰ってくると、私の使用後ブラをオカズに体をヒクヒクいわせながら潮吹きオナニーしている妹を見つけてしまいました。

「だって谷間の汗の匂いがくんかくんか……たまんないくんかくんか」

嗅ぐか喋るかどっちかにしろと言ってやりたかったですが、そもそも姉のブラをオカズにオナニーしている時点でどうかしていました。

[2]

「きよ、今日はお姉ちゃん、おっぱい手伝ってよ」

それ以来、私は妹の麻由のオナニーを手伝うようになっていました。いや、二人でやってる時点でこれはセックスなんじゃないのだろうかと思うのですが、まあそれはただの言葉の違いに過ぎないので考えないようにしておきます。そもそも、私たちは姉妹で、女同士……セックスという『性』という言葉より、もっと身近で自然な言葉の方が合っていると思います。

「あふ……お姉ちゃんのお口の中、乳首あったかくなつて……しゅきい♡」

さっそく麻由の声がとろけ始めます。

私はこの小さいおっぱいが大好きでした。小さいのにしっかりとした弾力はあるし、左胸を触る時はドキドキしているのが直に伝わってくるからです。だから、麻由の乳首は左の方が少しだけ色素が薄くなつていたりします。

「また、左胸ばっか、んひっ♡」

「だって、麻由の心臓、触って触って、ねだるんだもん。ご期待に答えてあげなきゃ」

しっかりとコリコリになった豆乳首を摘むと、心拍は嬉しそうに跳ね上がった。

「んあうっ！ あっ、あっ、アッ！」

乳首だけでこんなに反応しちゃうなんて、うらやましい体です。どこかでおっぱいは小さい方が感じやすいと聞いたことがあるのですが、あれは本当だったのでしょうか。

「ね、ねえ、お姉ちゃん……あたし、おま○コスイッチ、入っちゃったの。入れていい？ 指、入れていい？」

麻由はオナニーでさえ私に許しを乞うのを忘れません。私の目を使って興奮している意識があるからでしょう。そういう律儀なところが、たま



「お姉ちゃんの下着をお下がりさせてもらうことが、あたしの夢だったのに！」

そんな関係が続けて数ヶ月後のある日、とうとうぺったんこな妹もブラジャーを付けなさいとお母さんに言われたらしいのですが。

「仕方ないじゃない。私は急にボンって大きくなったんだから。パンツだけで我慢しなさい」

「パンツだけじゃ物足りないもん！」

物足りないって、ナニかに使う気が満々でした。

「元はと言えば、お姉ちゃんのおっぱいが大きいせいだよ」

完全に八つ当たりです。

「せ、責任はお姉ちゃんがしっかりとってよね」

「どう責任を取れと？」

「だから！ こういうこと！」

麻由は私の手を掴むと、そのまま自分のちっぱいの上に乗せて擦りつけました。

「あたしのおっぱい、お姉ちゃんのブラに合うまで、しっかりと育ててよね」

【続く】